

八戸工業港およびその周辺における ホッキガイ浮遊幼生調査

植木 龍夫・川村 要

はじめに

ホッキガイ浮遊幼生調査は昭和47年度に八戸、百石地先海域で一度だけ試みられた後は行なわれていなかった。しかしホッキガイの増殖対策を考えると、浮遊幼生時代の様子を知るのには大切であると思われるので浮遊幼生調査を実施した。

この調査を行なうにあたり調査船の運航にあたられた八戸市漁業協同組合所属の秋山金太郎氏にお礼を申し上げる。

調査方法

- 1) 調査年月日；昭和51年6月23～24日
- 2) 調査地点；第1図参照
- 3) 調査船；宝洋丸 3.30t ディーゼル20馬力
- 4) 採集方法等

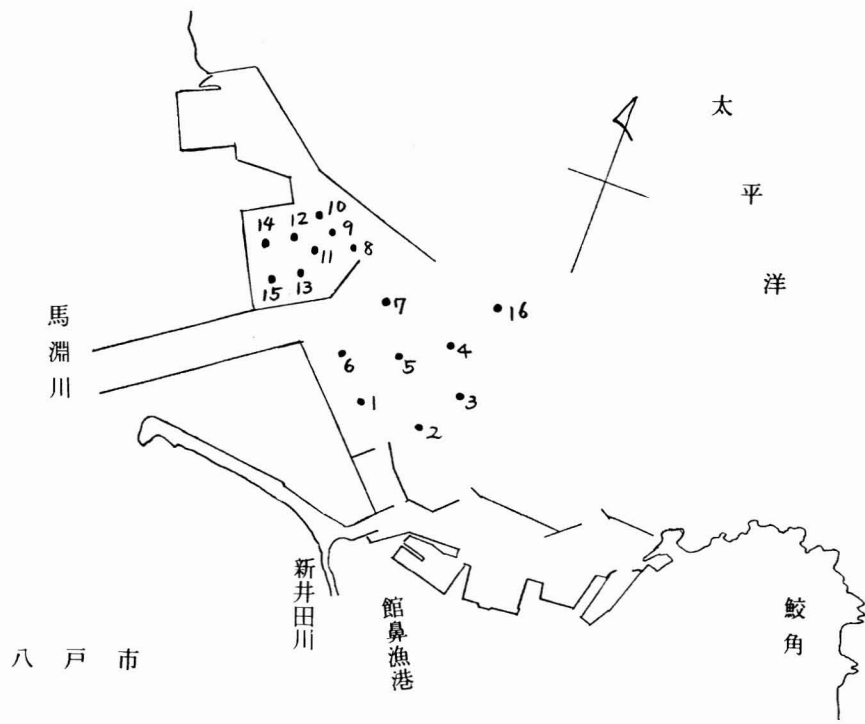
調査点を、第1図に示したようにホッキガイの比較的安定した発生場所といわれている八戸工業港にしぼった。採水はバンドン採水器（容量6.8ℓ）で、水深5m層と底層について（水深6.0～7.5mでは5m層のみ）6～8回行ない、目合い約100μのプランクトンネットですり過した後、プランクトンネットに残ったものを10%のホルマリン溶液で固定して持帰り検鏡した。

水深は間縄によって測り、透明度はセッキー30cm透明度板を使用して観測した。塩分量は取水密栓後持帰り、サリノメーターによって計測した。

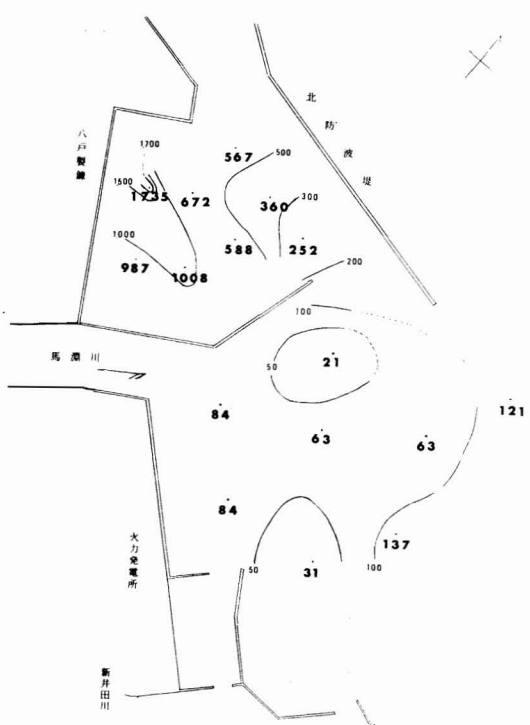
調査結果

ホッキガイの浮遊幼生の分布状況を第2図に示した。海水 m^3 当たりの出現量は調査地点によって21～1,735個と差があり、時にSt.13、14、15、では、987～1,735個見られた。概してSt.8からSt.15までの北防波堤と突堤に囲まれた海域で出現量が多い傾向が見られ、St.1～St.7及びSt.16の馬淵川から火力発電所の前沖にかけての海域では出現量がかなり少なくなっている。そして前の海域では岸近くに出現量が多い所があり、後の海域では岸近くよりむしろ沖合へ向かって多くなる傾向が見られた。いずれの調査点でも110～180μのホッキガイ幼生が見られたが、その大半は110～140μであった。水深は6.0m（St.14）～13m（St.16）であった。透明度は2.0～3.9mの範囲にあり、北防波堤と突堤に囲まれた部分では2.8～3.9mで、馬淵川から火力発電所にかけての前沖では2.0～2.5mであった。

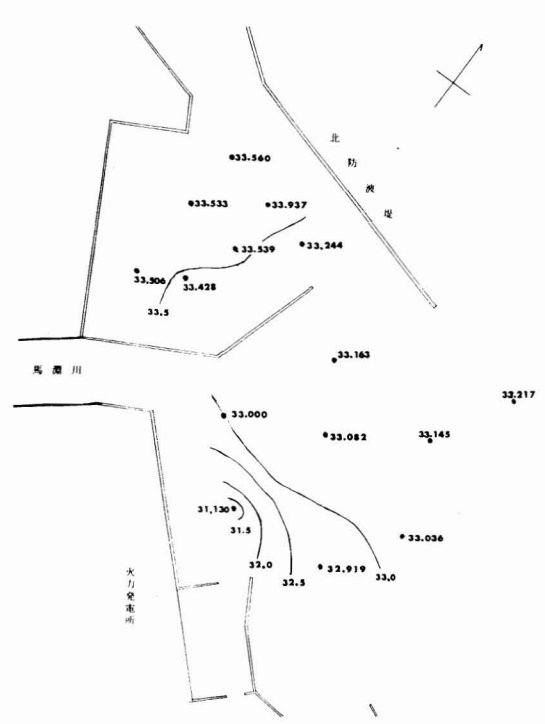
塩分量の分布を第3図に示す。塩分量は31.130%～33.937%の範囲にあった。特にSt.1において最も低い値を示しており、陸水の影響を強く受けているものと思われた。馬淵川～火力発電所前沖では岸から沖に向かって塩分量が高くなっており、北防波堤と突堤に囲まれた海域ではさらに高くなっていた。



第1図 調査地点



第2図 ホッキガイ浮游幼生の分布 (m²あたり)



第3図 塩分量 (-5m) 単位: ‰